

労働について

—キリスト教的労働観の一側面—

豊田真史

はじめに

中国武漢に端を発する世界的なコロナウイルスの感染拡大により、企業についても働き方が一変した。出勤至上主義とも言える日本においても在宅勤務が推奨され、多くの人が慣れない中環境に適応していかなければならなかった。そんな中筆者が感じたのは「労働とは何か」という単純な問いであった。以前なら皆の顔が見える中で、特に日本では人材が曖昧に評価されており、社員一人一人の責任や仕事が明確でなかった。しかし在宅勤務ではそうはいかない。筆者のような営業職では日々数字を報告し、その日に「何をしたのか」を明確にしなければならなくなったのである。姿が見えない分、はっきりとした結果を求められるというわけである。そんな状況下で上記の問いを絶えず抱いていた。「何をしたのか」と問われて何もしていない、何の価値も生み出せていない自分に気づいたのだ。そして会社から価値・意義を求められるほどに、自分の中でも疑問が沸き起こった。労働とは何かという問いに対して一度考えてみたいと思った。社会的、経営学的、心理学的に問うことも出来る。しかし今回は根源的な意味において、特に聖書、キリスト教思想的にいかに労働が捉えられてきたかを考え直すことによって、改めて働くことの意義・価値を問いたいと考える。筆者なりにこのコロナ禍において考え、生きたことのひとつの証になるとの思いで投稿させていただいた。

1. 神の創造おける労働

創世記 1 章において、神は人間を最後に創造された後、「産めよ、増えよ、地を従わせよ」とあるように、この地上を管理させる存在として描いている。これをアブラハム・カイパーは文化命令 (cultural mandate) と

呼び、これが神の創造の目的を表していると主張した。注目すべき点は同じ創世記の1章26節で「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう」として、人を神の似像 (imago Dei) として創造し、他の被造物とは異なる特別な地位を人間に与えられているということである。本来の人間はこの地上の被造物を適切に管理し・運営していく責任がある存在ということだ。この箇所を山中は「人間に委託されたので、人間は神の御業に参加する栄光をもつ。つまり労働は神の御業に参加するという本来の神聖性を持ち、労働する人間に尊厳さを付与する」⁽¹⁾として労働が聖書では神との関係性において根源的であることが述べられている。しかし続く創世記3章においてアダムとエバはヘビの誘惑に遭い、神の怒りにふれ、人は墮落しエデンの園から追放されてしまう。そこで「お前は顔に汗を流してパンを得る、土に返るときまで」(創世記3章19節)と言われるに至ることになる。墮落前は労働が神の計画への参与であったにも関わらず、それが「墮落後の人間の労働は苦しみであり、自然との戦いであり、生活のための苦悩と生の悲惨の呪いの場」⁽²⁾となり、まさに私たちが体験しているこの世の苦しみの原因と理解されてきた。その結果により労働が本質的でないものとされてしまったのである。

2. 十戒

創世記以外の旧約聖書における労働観はどうだろうか。旧約聖書において基本的には労働時間は何時間でなければならないとか、こういう職業が良いというような倫理設定は存在しない。十戒の第四戒にあるように安息日は明確に規定されていること、また「六日の間働いて、なんであれあなたの仕事をし」(出エジプト記20章8節)とあるように、その背後には労働をすることが前提となっているように見受けられる。もちろん近代の資本主義的な労働を意味していないことは確かではあるが、他にも「人は

(1) 山中良知(1965年)『社会学部紀要』(関西学院大学社会学部)第12号、100頁。

(2) 同上、102頁。

仕事に出かけ、夕べになるまで働く」(詩編 104 編 23 節)、とあり人間が働く存在として描かれている。この点をアラン・リチャードソンは「(旧約聖書の教えに関して) 仕事は必然的なものであり、まさに神により委託された人間の生活の機能である、ということです。人類の運命は労働に掛かっているが故に、人間は不平不満を言わずにそれを受け入れ、そのように喜んで服従する中で、人間存在に対する神の意図を成就すべきなのです」⁽³⁾として、労働が人間にとって神との関わりの中で恒久的なものであり、避けられない行為であると述べている。

3. 回復されたものとして 新約以降

以上のように旧約聖書が労働を前提として人間を描いていること、また墮落の罪の中にあってその本来の労働からの外れの状態となっている。新約聖書もそのことを概ね引き継いでいるように思える(テサロニケの信徒への手紙二 3 章 10 節)

また新約聖書(特に書簡)ではイエス・キリストの受難に倣うように勧める箇所がいくつかある。「善良で寛大な主人にだけでなく、無慈悲な主人にもそうしなさい」(第一ペトロの手紙 2 章 18 節)。それはこの世の主人が奴隷(労働者達)にとって「雛形」であり、無慈悲であってもそこに仕えることが求められている。そこに服従することでイエス・キリストに倣うようにしたのである。そして新約聖書においてはイエス・キリストにより贖罪があり、キリスト者はイエスを信じるものに罪の赦しと新しい生命を与えて、罪によって断絶されていた創造の業(文化命令)に再び参与するものとなった。「子とされた者は、御国の相続者の身分を与えられたものであるから・・・自分も召命を通して、その相続の完成の業に励むのである」⁽⁴⁾というように世界と積極的に関わらざるを得ないようになるのである。また「主の業に常に励みなさい。主に結ばれているならば自分たちの労苦が決して無駄にならないことをあなたがたは知っているはず」

(3) アラン・リチャードソン著、西谷幸介訳(2012年)『仕事と人間—聖書神学的考察—』新教出版社、40頁

(4) 春名純人著(1993年)『思想の宗教的前提』聖授産所出版社、105頁

(第一コリント 15 章 58 節) というように特に終末論的な関わりの中で業、労働が理解されている。この世の労働は過ぎ去るものであるが、新しくされたキリスト者はその創造の御業に積極的に参与させられることにより、神の栄光のために生き、働くのである。

結論

以上が聖書での労働観(生き方に近かったかもしれない)であった。対象はなんであれ、何かに生かされていることに目覚めて、そこに価値を見出していくという生き方こそ、必要なことであると思う。フランクルの言葉を借りれば、「私たちが生きることからなにを期待するかではなく、むしろひたすら、生きることが私たちから何を期待しているかが問題」⁽⁵⁾であって私たちが神(あるいは人生、社会、国家など)に期待を抱くのではなく、召し出されているということ、そしてそこに価値を見出すことが必要ではないだろうか。巨大な資本主義社会の中にあって私たちはふとした瞬間になぜ働かなければならないのかという疑問を抱く。それは給料を得ることは生きていくために必要なことだと自らを説得してみる。あるいは社会の為、会社のため家族のためという単純な倫理形式で納得しようとする。しかし答えは見つからない。現代はその意味で人々が人生の目的そして働くことの意味を探し求め、そしてその意味を自らのうちに見出せずに絶望してしまっているように思える。コロナ禍において自殺をした芸能人などがニュースで取り上げられていた。個々の事情には踏み込めないし、判断をあれこれと下すべきではないが、人生の目的、働く意味を喪失してしまった結果ではないだろうか。今回取り上げた聖書の考え方はほんのひと握りに過ぎない。しかし聖書は墮落した世界にあってもう一度私たちが回復をしていくことを求めている。再び本来あるべきところへキリストにあって帰っていく。この混沌とした世界であるからこそ、そのシステムに飲み込まれ、心を豊かに保つためにも、確固とした労働価値観を持ち、呼びか

(5) ヴィクトール・E・フランクル著、池田香代子訳(2002年)『夜と霧』みすず書房、129頁。

けに目覚めて生きていくことが重要ではないだろうか。